

# じょうこうじ 掟光寺だより

## 行事案内

●11月7日(月)  
「宗祖報恩講」

13時30分から



## 仏教たとえ話

### 【蛙の目】 かえる

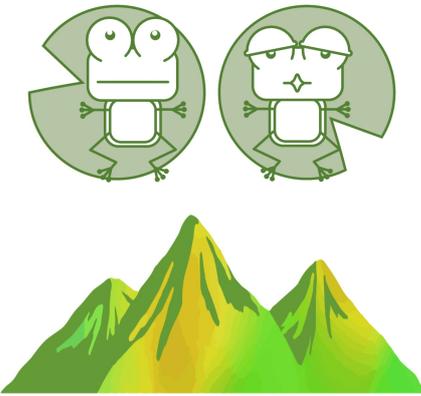
昔々、京都に住む蛙が大阪を見物したいと思つて、春のあたたかい日に出発し、西国街道を山崎に出て、天王山に登りました。その時偶然にも、大阪に住む蛙が京都を見物したいと思ひ立ち、西国街道を高槻から山崎を経て、天王山に登りました。

(天王山。京都府大山崎町の山。西側は摂津国(大阪府)、東側は山

令和4年  
11月号

城国(京都府)に面しており、ちょうど国境の山であった。豊臣秀吉と明智秀吉による山崎の戦いが有名。標高は270メートルと気軽に登れる山。)

二匹の蛙はその山の頂上で、ぼったり出会いました。お互いに旅のいきさつを話した後、京都の蛙は「ここまで来るのも大変だったが、まだ半分の道のりだ。しかしこの頂上からは、京都も大阪もよく見えるだろうから、一目見ておくでしょう。そうすれば向こうに行く楽しみも増えることだろう」と言ったので、蛙はお互い背伸びをして立ち上がり、足のつま先立てて向こうを見た。



すると京都の蛙は「噂に聞いた難波の名所も、京都と変わりないじゃないか。これならしんどい思いをして行くまでもない。もう帰るとしよう」といい、一方、大阪の蛙も、「京都は花の都と聞いていたのに、大阪と少しも変わらないじゃないか。それなら俺もこれから帰ることにしよう」と言つて、二匹もお互いに来た道を帰つて行つてしまった。

どうしてそんなことになつてしまったのでしょうか?

実は残念なことに、二匹の蛙は実際に気が付かなかつたのである。彼らの目玉は背中についているを忘れていたので、背伸びして向こうを見ているつもりが、実は自分の故郷を見ていただけであつたのである。

(鳩翁道話)

自分の目で確かめることは大切なことであるが、自分の目で見ただけだから間違いないと思つた時は気をつけなければならぬというたとえ話。たとえ目で見たとしてもその目が正しく物事を見ていなければ、それは蛙の目が背中についているのと同じく、かえて自分の目に欺かれてしまうのである。

## くらしの仏教用語

### 【しよつちゅう】

「彼はしよつちゅう風邪を引いている」「あのCMはしよつちゅうテレビで流れている」など、「いつも」や「年中」という意味でよく使つた言葉です。漢字で書くと「初中」と書きます。これは、「初中」に「後」を加えた「初中後」が語源になつたおり、仏教のお経の中にも出てきます。

たとえば、『法華経』の中では「正しい教えを説くに、初善、中善、後善なり」(いつも道理と表現を兼ね備えた教えを説きなさい)とあります。

始め善く、中頃も善く、後にも善くという意味から「いつも」となり、「初中後」とまとめて呼ぶようになり、やがて、「後」の部分が略されて、「初中」になつたそうです。

昔はいい意味で使つていたのがいつの間にか「彼はしよつちゅう遅刻する」などよくない「いつも」で使われるようになったのですね。

